

まとめ

周知のようにこの場所は平安時代において一条より北の京外であった。それが平安時代中期（10世紀）になると、右京の衰退にあわせて、都市域が一条大路を北に超える。本調査区で出土した緑釉陶器は、それを物語るものとして位置付けられる。

鎌倉時代以降、この地区の周辺にも貴族の邸宅が定着する。記録によれば、西園寺公経が町通一条北に邸宅を築き、寛喜3年（1231）には北小路室町の検非違使別当家の小屋が火事になっている。

そんな中、伏見天皇が永仁6年（1298）に退位したあと、新町上立売上ルの里内裏のひとつ（持明院殿）を仙洞御所としたことにより政治の拠点となっていく。

記録によれば、観応（かんおう）2年（1351）「洛中の狼籍常篇を絶す。さるころより木戸を構う。」また、文和2年（1353）「このあたり城戸を構え、ずいぶん警固すべきの旨、菊亭殿（後伏見の女御。広義門院西園寺寧子、公衡の娘、1275～1351）の仰せなり。西大路南北並びに柳原北釘貫（町々にある城戸）辺り、殊に構えしむべき。」などの記述がみられ、ある種の緊張状態がこの地を覆っていた可能性がある。

本調査区で見つかった堀（溝6）はおおむねこの時期およびその直後に当たると考えられるため、これらの社会情勢との関係を考慮に入れてみる必要もある。

現在の新町キャンパスの中心部は、山城名勝志には「桜御所 上立売新町西、五辻北、近衛辻子東にあり、近衛殿の別第なり」とあって、室町時代以降、藤原氏北家の嫡流で五摂家の筆頭であった近衛家の邸宅がおかれていた場所としても知られているが、その記録が登場するのが、この後である。

以下主な記録をあげる。

応仁元年（1467）京都焼亡のこと。近衛殿、鷹司殿は焼候はず

文明8年（1476）室町殿の炎上にあわせて、伏見殿等の御陣屋悉く炎上。

文明10年（1478）室町付近に大火災がおこり、近衛邸の御霊殿などが焼亡。

明応9年（1500）京都大焼亡、近衛殿小川以東、烏丸以西、近衛以北、柳原以南炎上。

弘治3年（1557）立売町400軒余焼亡。近衛殿炎上。

以上のように少なくとも15世紀後半以降、この地区の周辺に近衛邸のあったことがわかる。

各時代における屋敷地の範囲が確定できないため、断定するには至らないが、調査区の南東隅（1トレンチ）で確認された石列と柱列は、その存続時期から、近衛殿の屋敷の一部を構成していた可能性を示唆する。

16世紀以降、この地区の周辺は、上京の中心地として、繁栄を遂げる。

元龜4年（1573）には、織田信長の不興をかい、焼き打ちに遭うが、「洛中洛外図」にも商店の並ぶ繁華街が描かれ、17世紀初頭の「毛吹草」には、縊（くくし）染物の産地として立売が記されている。

そんな中、享保 15 年 (1730) の 6 月 20 日、昼八つ、上立売室町西へ入町上立売町、大文字や五兵衛居宅より出火し、西陣一帯が大火に遭う。また、天明 8 年 (1788) 正月 29 日、鴨川四条下がるの団栗図子の空き家から出火。京都市中が被災する。本調査区もこれらの被災地の中にふくまれるが、調査区の北半で確認された江戸時代の火災層は、これらの記録を示すものと考えられる。

ところで京都は中世以来、高級手工業製品の生産拠点であった。金属製品に限ってみるだけでも、11 世紀の「新猿楽記」以来、七条を中心とした地区に鍛冶鋳物師銀金細工師などが集住し、鏡をはじめとするさまざまな製品をつくっていたことが知られる。

その後、応永 18 年 (1411) には、三条釜座 (三条新町西) の職人が近江明三寺の鐘を鋳、天正 4 年 (1576) には、村井貞勝が三条釜座の営業権を安堵するなど、その中心を京都の中心部へ移して行くが、鏡については、天正 16 年 (1588) の年号をもつ (禁裏御用鏡師) 青家次銘「桐竹文鏡」の存在が知られ、「青」家という鏡師が京都を代表していたことがわかっている。

ところがこの「青」家が 17 世紀後半には上京畠山の辻子に居を構えていたことが記録に残っている。調査区の北半に展開する鏡工房群は、時期は江戸時代前期から中期におよび、一部は 16 世紀にさかのぼる可能性がある。江戸時代面から鏡の鋳型が出土し、鋳造や鍛冶の炉や蔵の跡も確認された。なかでも江戸時代中期の工房群の最終景観は、上立売通りに面して、東西は 45m 以上、南北 15m 以上の範囲にひろがり、少なくとも 5 棟の土蔵と、6 基以上の炉がならぶ。

仮にこれらの遺構が一体のものであるならば、当時の屋敷地としてきわめて大規模なものになるため、記録にみえる「青」家との関係も注目されるところである。

これらの調査成果は、上京の歴史と近世の鋳造作業の実態を復原するための、貴重な資料を提供するものと考えられる。

所収遺跡名	新町校地遺跡 北別館地点	
所在地	京都府京都市上京区西大路町 61 - 1	
コード	市町村番号	26100
	遺跡番号	221
北緯	35° - 01'	
東経	135° - 45'	
調査期間	2002. 0212～2002. 0426	
調査面積 (㎡)	1, 400	
調査原因	同志社大学新町別館の改築	
種別	都市遺跡	
主な時代	中・近世	
主な遺構	室町時代の堀、江戸時代の建物群および炉群	
主な遺物	中近世土器・陶磁器、金属製品、鑄造関係遺物	

本文の執筆は、鋤柄俊夫・松田度が分担し（以下参照）、編集を松田がおこなった。

鋤柄：はじめに、Ⅰ、Ⅲ - 1、Ⅲ - 2 - ①・②、まとめ

松田：Ⅱ、Ⅲ - 2 - ③

なお、図 3～8 は株式会社アジア航測が作成（図 8 は写真実測）。図 9 の製図は、有吉康徳・市澤泰峰がおこなった。